

祝 辞

祝 辞

許 徳 清

皆様、今日は九州大学皮膚科の100周年記念日です。心よりお慶び申し上げます。私は中国广州の中山大学の許徳清です。九大皮膚科古江先生よりお招きいただき、この記念に出席する機会を賜り、とても光榮に存じます。

九州大学は悠久の歴史をもって世界的に有名な大学です。その医学部、皮膚科では多くの輝かしい業績を挙げ、特に真菌学方面の研究はすぐれ、今日まで引き続き教室の主要研究テーマのひとつとなっており、世界をリードする大学の一つです。また、西日本で発生したカネミ油症事件の原因究明と治療に尽力し、地方保健事業に対して大きく貢献しました。加えて色素細胞や悪性黒色腫の研究を大いに進め、最近では特に樹状細胞に関する研究に全力をそそぎ、悪性黒色腫に対する免疫療法に応用しています。また、アトピー性皮膚炎の新しい治療薬の研究も行っていると聞いています。九大皮膚科では皮膚の所見だけでなく、患者の全身状態や内科学的所見、これらすべての経時的变化や相互の関連性などについて気を配った上で、「皮膚は内臓の鏡である」という広い視点で患者を診療するように若手医師に指導されて、多数の人材を輩出しております。

私は交流研究者として1987年九州大学皮膚科で勉強し、多くのことを経験し学び、帰国してから、皮膚科の主任となりましたが、教室のマネージメントの面でも、膠原病や乾癬の研究の面でもとても役立ちました。これは占部先生をはじめ、旭先生、中山先生、松田先生、また教室の皆様から色々なご指導をいただいた結果だと思っています。本当に一方ならぬお世話をいただき、いつまでも心に残る思いです。改めて、心からお礼申し上げます。

貴大学の益々のご清栄と発展をお祈り申し上げます。

今日は本当におめでとうございました。

(中国广州中山大学皮膚科)

Congratulatory Address to Centennial Anniversary of the Department of Dermatology, Kyushu University

Young Pio Kim

It is my great honor and privilege to deliver a congratulatory address to the centennial anniversary of founding of this famous institution. I deeply appreciate the invitation and would like to express my gratitude to Professor Masutaka Furue and his faculty staffs as well as to Professor Harukuni Urabe.

As acknowledged by all the medical authorities, your institution has, in the hundred years since its foundation, under the excellent and devoted leaderships of Professors Kenkichi Asahi, Seigo Minami, Kentaro Higuchi, Harukuni Urabe, Yoshiaki Hori, and presently Masutaka Furue, excelled in the scientific achievements and in the developments of service to the sick. And it is now leading the world in the state-of-the-art research, as well as in promoting good relations with other countries, particularly with Far-East Northern Asian countries, which share common ethnical and cultural backgrounds.

Professor Urabe has, as I still clearly recall, been pivotal in starting the “English-Speaking Session” in the 75th Annual Convention of Japanese Dermatological Association in 1976, where I had been invited. At the business dinner party of the senior members, I have proposed the “Joint Meeting of Japanese and Korean Dermatologists”, which, I thought, would be most effective in promoting mutual understanding and cooperation between the two countries that are destined to be the nearest and closest neighbors, but somewhat alienated by the tragical history of animosity in the first half of the last century. With the judicious judgment agreed by the Board of JDA, in which eminent pioneering professors such as Atsushi Kukita, Harukuni Urabe, Yasuo Asada and others were the members at that time, the First Joint Venture was launched in 1979 in Seoul. The successful start of our Joint Meeting cleared the skepticism and criticism from both sides. Since then, it has produced bountiful fruits in innumerable ways, not only in exchanging scientific ideas and knowledge, and in promoting cordial ties among young people of both countries, but also in improving spoken English, which has become a “must” in this global age. I personally take pride in that our venture has provided the bench-marking model to other medical disciplines, and many others followed suit in making their own joint meeting between both countries. I sincerely hope that this Joint Meetings will continue to be one of the best channels to connect both countries for a long time to come. Again on this occasion, I would like to express my hearty gratitude to those Members of Board, again.

I congratulate again to the hundredth birthday of your institution, and sincerely hope that you will continue to successfully lead the dermatology in the world with brilliant ideas and technologies in the coming century of your foundation. Please let me thank you again to Professor Furue and the Staffs and to Professor Urabe. Thank you.

(Prof. emeritus Department of Dermatology, Chonnam University Medical School, Kwangju, Korea)

Congratulations to the Dermatology Department of Kyushu University on its Centennial Anniversary

Hsin-Su Yu

It is difficult to maintain a thriving department for 100 years. On behalf of the Chinese Dermatologic Society, Taipei, I would like to express my admiration and congratulation to the Dermatology Department of Kyushu University for its outstanding job in the past 100 years.

The legacy began in Nov 20th, 1906, when Professor Kenkichi Asahi established the Dermatology and Syphilology Lectureship in Kyushu University. For the next 100 years, this department played an indispensable role in the development of dermatologic science in Japan. During this period, the department nurtured 16 outstanding professors in the field of dermatology. Continuing the legacy of Professor Asahi, Professor Shiougo Minami focused the department's research objectives on the clinical applications of basic dermatologic research. Moreover, the "Minami Award" was created to promote more investigations on dermatologic science. This award later became the most prestigious recognition for scientists who are engaged in dermatologic research in Japan.

In 1968, after the Kanemi Yusho event, Professor Kentaro Higuchi started the Yusho study group. Following in the footsteps of Professor Higuchi, Professor Harukuni Urabe, Professor Yoshiaki Hori, and Professor Masutaka Furue have all led the department to become the leading research center for studying polychlorinated biphenyls poisoning. Their works have made significant contributions to the diagnosis, treatment, and prevention of PCBs poisoning.

For years, The Kyushu University Dermatology Department has played a leading role in the research concerning mycology, syphilis, dyschromia, melanoma, and atopic dermatitis. Recently, under the guidance of Professor Furue, the department is actively engaged in corresponding and cooperating with foreign institutes and research centers. Therefore, the department has laid its foundation to meet the challenges of the next century and is marching on to become a world-class dermatology department.

The dermatologic society in Taiwan has long had a close relationship with the Kyushu University Dermatology Department. The clinical experiences and basic researches regarding PCBs intoxication of the department have provided Taiwan with valuable information on early diagnosis and prompt treatment of PCB poisoning. More interaction and cooperation are foreseeable for the research groups from both sides.

Professor Urabe, Professor Hori, and Professor Furue have been role models for aspiring young dermatologists in Taiwan. On behalf of the Chinese Dermatological Society, Taipei, I would like to again express my foremost admiration and congratulations to the dermatology department of Kyushu University. I am looking forward to more great things from this department in the next 100 years!

(Professor and Chairman, Department of Dermatology National Taiwan University. President, Chinese Dermatological Society, Taipei)

祝 辞

金 出 英 夫

この度、皮膚科教室におかれましては、開講100周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。本日は記念式典にお招きいただき、その上、このような晴れの席で御挨拶できますことを、まことに光栄に存じます。

この100年間に初代の旭教授から当代の古江教授まで御6方の教授によって皮膚科は指導されてきました。私が九州大学医学部を卒業いたしましたのは、大学紛争の始まり、カネミ油症事件発生の昭和43年ですが、第3代樋口教授の御還暦前後でした。正門から入って直ぐ左の洒落た木造2階建の研究室で、教室員の先生方が悠然と、また楽しそうに実験をなさっていたお姿を今も覚えています。梅毒学と真菌学を中心に研究が行われ、日本における皮膚科学の中心はここにあるという感じでした。第4代の占部教授の時代には真菌学、第5代堀教授時代には悪性黒色種、第6代古江教授の今日は分子皮膚病学、免疫学にと、時代の変化に対応して研究の焦点が合わせられ、それぞれの分野で顕著な研究業績を挙げられると共に、国際学会を催される、という発展ぶりには、只ただ敬服いたしております。

皮膚科学教室では学術雑誌「西日本皮膚科」を昭和8年より刊行され皮膚科学の発展に大きく寄与されてきました。私はこの雑誌の歴代の皮膚科教授によって書き続けられた編集後記の隠れたファンであります。先生がたは名文家揃いでありまして、実に味わい深い文章に溢れています。こういうところにも皮膚科学教室の懐の深さ、100年の歴史の重さを感じます。

最後になりましたが、九州大学皮膚科が開講100周年を大きな節目として、古江教授を先頭に益々発展されますことを、また、御列席の教室関係の皆様のお多幸、御健勝を心から祈念いたしまして、お祝いの言葉と致します。本日は誠にありがとうございました。

(九州大学 大学院医学研究院長・医学部長)

九大皮膚科百周年に寄せて

三浦 祐 晶

九州大学医学部皮膚科（大学院になって名称が変わったようですが）が百周年を迎えられたこと誠にめでたうございます。御関係の皆様のお喜びもさぞかしと存じます。私も幸いに式典並びに祝賀会に参列させて頂きましたが、さすがに歴史の重さを感じるとともに、昔を振り返って懐かしい思いを禁ずることができませんでした。

私は昭和19年9月の繰上卒業でしたが、大学院に残ったので7月に当時の皮膚科泌尿器科教室に入局致しました。戦後どういう訳か記憶が定かではありませんが、皆見省吾先生にお見知りおきを頂いて、学会などで福岡へ参りました節は、先生の行き付けの料亭での小宴にお招きを頂いて、色々お話を伺った記憶があります。これが私の九大皮膚科との関わり合いの初めであったと思います。

樋口謙太郎先生に親しくお目にかかり、印象を深くしたのは、確か昭和31年に先生が主催された福岡の日本化学療法学会総会の時であったかと思えます。この時の会員懇親会はキャバレーで開催されましたが、ダンスが始まると先生が多分真っ先に出られてダンスをされたのには、その時教授になったばかりのまだ30歳代であった私には正に驚きでありました。そんな私に気付かれたのでしょうか、先生は私の側に寄って来られて、そっと「君、教授はこんなこともしなくちゃならないんだよ。」という意味のことを話されました。その一言で私の肩の力が抜けて、その後の教授勤務が何とかできたのであらうと感謝しております。

もう一つ感服したのは、先生がよく文章を書かれたことです。教科書はもとより、最初の外遊のあと出された紀行文集（欧米紀行－医学者の眼）、それに随想集「ひとりごと」、「どんたーく」、「巡る歯車」（ロータリーのガバナーをされた後に出されたもの）など、御多忙の中でよくこれだけ書かれたものと感嘆するばかりでした。「皮膚と泌尿」（後の西日本皮膚科）の編集後記のような形で書かれた短文も、私は毎号まず真っ先に読ませて頂くのが常でありました。その蔭には先生の大変なご努力があったことは、逝去されてから後奥様からお聞きしましたが、これだけは真似をしようと思っても到底追い付くことはできませんでした。

私は安田利顕先生とお近付きを頂いてから、そのグループの客員といった身分で樋口先生のグループとゴルフで御一緒する機会が多くございました。樋口先生のゴルフのライバルは東京通信病院の小堀辰治先生で、どういう訳か私は屢々このお二人と一緒に組にさせられました。このお二人の勝負を拝見するのはとても楽しみでした。小堀先生は長尺のクラブで飛距離は樋口先生を越えていましたが、アプローチ、パットは樋口先生の方が上で、グリーン上で逆転することもよくありました。スコアカードには○（勝ち）と×（負け）が書いてあって、樋口先生が負けた時は残念そうに「カンパイ（完敗）じゃ！」と、おっしゃったのが今も耳の底に残っております。

私の恩師は京都府立医大に移られた岩下健三先生ですが、私の自分勝手な感覚では師はもう二人で、皮膚科教授としての師は樋口先生、皮膚科医としての師は安田先生であったと今でもひそかに感謝しております。

占部治邦先生が教授になられてからも幸いに縁が切れることがなく、お付き合いをさせて頂きました。先生は正に樋口先生の衣鉢を継がれて、学問の道でもまた文筆の面でも優れた才能を発揮されて、「西日本皮膚科」の毎号の巻末短文の執筆の他に水墨画を嗜まれて、それらを一括して随想集「世はさまざま」を発刊して我々を楽しませて下さいました。占部先生の御好意により私は以前と同じように、福岡地方会に出席させて頂き、同時に「新三浦」での懇親会や二次会にお供を許され、またゴルフ・コンペや大相撲の見物やら、その他何かと地方会の勉強以外にも色々楽しいことにお招きを頂いて、本当にお世話になったことは忘れることができません。その上、私の定年退職の節には先生から立派な博多人形を頂戴して、これは私の大切な記念品として現在も部屋に飾っております。

振り返ってみますと、私の九大皮膚科とのお付き合いは恐らく通算30年位になるのではないかと思います。ある時九大の他科の先生に、「君は九大の何年卒業だい？」と、尋ねられてびっくりしたことがありましたが、九大皮膚科の一員と間違えられていたのかも知れません。にも拘らず私はお世話になるばかりで、何一つお返しになるようなこともできませんでした。誠に厚かましいことであったと今更ながら慚愧に堪えません。どうか今後は古江教授のもとで、教室が益々発展されますよう心から祈念する次第でございます。

どうも長い間ありがとうございました。

（北海道大学名誉教授・皮膚科）

九州大学医学部皮膚科教室と私

久木田 淳

九州大学医学部皮膚科教室開講百年記念会が平成17年11月19日ニューオータニホテル福岡において盛大裡に開催され、併せて記念福岡地方会が九州大学医学部百年講堂で行われました事を心よりお祝い申し上げます。

私が昭和24年東大皮膚科教室に入局した直後、当時都立駒込病院皮膚科部長安田利顕先生に、都内で九州大学医学部皮膚科教授樋口謙太郎先生に紹介されたのが九州大学皮膚科との出会いでした。その後、昭和39年より昭和48年の札幌医科大学奉職中、樋口教授のお招きで九大皮膚科での講演および九大皮膚科開講記念日11月23日に毎年開催される記念福岡地方会に出席し、博多名物「水たき」、「ふく料理」をご馳走になり、また大相撲福岡場所を見物しました。昭和46年札幌市で第35回日本皮膚科学会東部連合地方会を開催した時には福岡大学樋口先生、九大占部先生、別府市の九大温泉治療研究所中溝先生が来札され大いに学会を盛上げて戴きました。また学会後は学会記念ゴルフ大会に3先生も参加され大いに懇親の実を挙げる事が出来ました。特に大正13年生まれの占部先生、中溝先生とは同世代のものとして特に親しくお付き合い戴ける様になりました。昭和48年に私が東京大学に転出して間もなく、東京通信病院皮膚科部長小堀辰治先生と福岡市の皆見省吾先生の御自宅で東京大学に転勤の報告に参上しました。当時先生は喉頭の手術後で先生は筆談でメモ用紙に「おめでとう」と、書いて下さり感激致しました。東大皮膚科では毎年1回東大皮膚科杯ゴルフ大会を川奈ゴルフ場で行っておりました。この大会には九州より、樋口、占部、中溝、田代先生、関西より朝田先生、北海道より三浦先生、山形市より吉田先生等が出場されました。樋口先生と小堀先生とのゴルフ対決は毎年話題になりました。樋口先生は会が終わると来年の開催日をメモされ大変楽しみにされていました。この会は東大皮膚科の若い医局員にとっても多くの先輩と1日共に楽しむことで多くの得るものがありました。

昭和52年メキシコシティで開催された第15回国際皮膚科学会終了後占部、中溝先生と、昭和56年タンザニアでの第1回汎アフリカ皮膚科学会へは中溝先生と御一緒に旅行が出来ました。

占部先生が九大を退官され、昭和62年に Harvard 大学の Fitzpatrick 教授の私と兄弟弟子である堀先生が山梨医科大学より九大に転勤され、私にとって身近に感じる様になりました。

平成6年堀教授が会頭での第93回日皮会総会の時の福岡ドームでの皮膚科学会の4支部対抗野球大会は大好評でした。平成12年堀先生が他界されたことは残念でした。堀先生に引続き東大昭和55年卒の若い古江先生が九大教授に就任されたことは益々私にとり九大皮膚科は身近に感じる様になりました。

今後九大皮膚科教室の益々の御発展を祈念するものです。

(東京大学名誉教授・皮膚科)

九大皮膚科創立百周年記念に際して

思い出すままに

朝 田 康 夫

皮膚科教室2、3の先生との思い出話で責めを果たしたいと思います。

樋口謙太郎先生には昭和48年に別府の大分地方会で初めて親しくお話を伺う機会があり、九州のボスとして貫禄充分な、存在感あふれる風貌と何となくユーモアを感じさせる人間的魅力に惹かれた。以後学会やゴルフでお会いする機会も増えたが、福大を最後に退職される頃ドーンタークという随想録を頂いた。その中でバンカーと女房を怖がってはゴルフは上達しない、ブービーとは漁船の尻をおっかけるかつお鳥で、その他に馬鹿、まぬけという意味もある等ざれ言の紹介や、パートナーのスコアカードには〇—×だけでよい、何時もホールマッチだから計算するのに便利だとのコメントがあった。ここにいうパートナーとは無二の好敵手の当時の東京通信病院の小堀辰治先生と推定した。

占部治邦先生とは久木田教授を編集委員長に3人でマルホ皮膚科セミナーの編集委員を長年やったが、茫洋、春風駘蕩の雰囲気、芯は中々強くイエス、ノーが明快で専門分野の真菌症の他、油症の問題や近年少なくなった梅毒に対する関心の低下に警鐘を提起されたことなどが印象に残っている。京都での委員会後は夕食会でだべるのが大きな楽しみで、同席の先斗町の芸者も何時も同じメンバーであった。彼女らへのお土産は久木田先生、ゴヂバのチョコレート、占部先生、明太子と決まっていたが、自分は何時も土産を忘れ、芸者に冷やかされて大阪名物たこ焼きをとも思ったが遂に持って行く機会を逸した。

九大講師だった西尾一方先生とは昭和40年から41年までのドイツ留学時代に親しくなったが、博学で明るくユーモアに富み魅力的な人であった。ヴェルツブルグについて3日目、まだ下宿で荷物の整理にてんやわんやの最中に突然日本から電報でフライブルグのドイツ皮膚科学会総会の開会式に出て当時大阪医大の学長で京大の大先輩である松本信一教授へ授与されるホフマン賞を代理で受け取れと下命された。仰天したがなんと総会は明日。早速急行列車で発ち疲労と眠気の中翌朝の4時にフライブルグに着いた。学会開催までの時間をどうしようと思案するうち、西尾君もこの学会で口演することを思い出し、彼のホテルへ急行、いい訳もそこそこにダブルベッドにもぐりこんで一寸眠ることが出来、おかげで大役も無事果たせた。彼はその後産業医大の教授に転じたがその後肺癌で亡くなられた。死の迫っていた頃、福岡での学会の懇親会に蒼白い顔で車椅子で出て来られてびっくりした。最後の別れを告げる為と思われる凄い精神力に驚きつつお互い努めて何気なく会話したのが忘れられない。

現教室主任の古江増隆先生とは、平成元年にワシントンでの三大陸研究皮膚科学会のと看夜8時に空港に着いたが一緒に積んだ荷物が出てこない、成田から同じフライトで来られていた東大組の中の英語が上手な古江先生が走り回って情報を集めてくれて明日朝届くことを知り安眠できた。この間の百年記念会の際その話をしたが忘れた？とのこと、何時かは思い出してくれるものと思っている。少壮気鋭の教授の下九大皮膚科の益々のご発展を祈念するものです。

(関西医科大学名誉教授・皮膚科)

九州大学皮膚科開講百周年を祝う

—50年余にわたる感謝の思いをこめて—

武 田 克 之

九州大学皮膚科学教室が明治39年に開講され、本年度で百周年を迎えられたことは誠に目出度く、心からお祝い申し上げます。九州大学皮膚科（以下九大皮科と略記）と縁が深く、兄貴と慕ってきた徳島大学皮膚科学教室（以下徳大皮科と略記）にとっても大きな喜びである。

九大皮科との縁は、昭和23年に徳大医学部皮泌科が開講され、初代教授として九大皮科から荒川忠良先生が就任されて始まった。しかも、昭和27年皮膚科学会総会で皆見省吾教授の弟子では最初の宿題報告を担当され、まだ設備の充分でない徳大皮科で研究した生理方面の立派な業績を報告し、諸家に齊しく嘆賞された（皆見）。その宿題報告を完遂するため人手不足を補うべく、まだ学生であった私も動員された。恩師荒川教授は旧制松山高校の先輩で、後輩の私ら旧松高出身者を可愛がって下さり、この動員が皮膚科医として私の幸せな道を開いてくれた。

当時の九大皮科は若かった私らにとって Champion の集まりであった。チャンピオンとは“The Concise Oxford Dictionary（第6版）”によると、「ある人のために代って戦ったり、ある主義主張のために代って議論する人」であるという。性病・梅毒、細菌・真菌学、病理組織学等々の広範にわたる領域の Champion に溢れていて、大いに刺激された。諸先生は徳大皮科開講の節目節目には御来徳され、その蘊蓄を披露された。昭和24年の第1回日本皮膚科学会四国地方会開催時には富川、樋口両教授が、開講10周年には皆見省吾名誉教授、富川、樋口両教授に御来徳頂いた。その際、皆見先生からは盃を傾けながら「武田君、君は荒川という素晴らしい師匠をもって幸せだよ。盛り立てて頑張れよ。」と激励され、心を引き締めながら幸福感に浸った。さらに開講15周年、30周年には、九大皮科（占部教授）の御配慮で、皮と泌、西日本皮膚をかりて記念号を刊行したことなど、次から次へと思い出される。これらの御指導、御支援が四国における初の皮膚科学会総会（第89回、平成2年）開催に繋がったと深く感謝している。

師匠荒川教授はそのしたたかな酒豪と仕事ぶりから Eisenmann 次いで Superman（樋口教授）のニックネームを呈上され、皮膚生理機能に関する系統的な新しい研究分野を教室に確立された。さらに四国医学雑誌の創刊、附属病院長など管理面にも大いに実力・指導力を発揮された。「指導者たるものは、いつも必要にせまられて止むを得ずとる行動でも、自分の意思で行っているふりをしなければならない。」（マキャヴェリ・会田）を黙々と実践された。その姿勢に魅了され、後に管理職についた私も大いに参考にさせて頂いた。

昭和30年初頭から毎年、私ら徳大皮科の若者は初冬の博多に九大皮科を訪ね、福岡地方会に参加して勉強し、夜は東中洲等へ出陣してはじめて一年を終えた気になったものである。航空機で旅行する場合、時間差により東へ行けば人生が縮まり、西へ行けば伸びる。そこで西へ行く方が疲れも少なく、人は人間の極楽浄土が西にあると考えたという（加藤、北野）。若い私らにとって博多は差詰め極楽浄土であったといえよう。

先日、九大皮科百周年記念式典に参加し、式典の記念写真会場で昔の九大皮科教室の建物、ポリクリ風景などを見て、懐かしさ一入であった。また、式典の事業をとりしきられ、盛り上げられた古江教授に惜しみない感謝を捧げたい。人生に往復切符はなく、最終駅に近づいている私らも他人のため、自分のために日々を精一杯生きている。

最後に、過去の百年は来たるべき百年の指針になりうると考えられ、九大皮科が西日本いや、日本における Champion としての益々の発展と、古江教授の尚一層の御健勝を期待して御祝辞とする。

（徳島大学元学長）

月光仮面

熊澤 浄一

私はインターン終了後、昭和35年（1960年）九大泌尿器科に入局した。当時としては珍しく4人入局で、大歓迎を受けた。いわゆる官公立大学としては、最初に設立され36年の歴史を有していた。平成18年（2006年）で82年目を迎える。

九大医学部正門を入れてすぐ左の木造2階建て内に泌尿器科教室は有り、数多くの松の木に囲まれている。柱1本1本に手彫りの彫刻があり、階段の手摺りも趣のある曲面を持つ、建築大工の情熱が溢れ出た歴史的建造物であった。数年後に建てられた、隣の耳鼻咽喉科には彫刻は無く、いささか優越感を覚えたものである。

泌尿器科は皮膚科と、この芸術的建造物を共有していた。わが国では、偉大な土肥先生の影響下、明治以来皮膚・泌尿器科として一般に認知されてきた為、ほとんどの病院・診療所は皮膚・泌尿器科となっていた。私が入局した頃から、次第に皮膚科と泌尿器科を分離する動きが起こっていたが、病院に出張する折は両科の診療技術を有していた方が良いとされていた。したがって、私も皮膚科の外来診療は必須、入院患者も数名担当となっていた。しかし、両科の実質的分離・独立を図るべしと主張する者が多くなり、この制度は次第に縮小され「泌尿器科は外科である」をモットーとされた、百瀬俊郎教授就任の昭和38年（1963年）に廃止された。したがって、私はその端境期の貴重な(?)証言者である。

皆見省吾名誉教授の下への泌尿器科からの最後の派遣医でもあった。週1回の外来勤務だったが、医師としてのみならず、大成された偉人の生き方を身近で学ぶことが出来た、私にとって真に貴重な8年間であった。「君にも皮膚科専門医の資格を与えてあげよう」との言葉を頂いた折「いえ、私は泌尿器科医ですから、結構でございます」とお答えした時の、大きな目を更にぐーと開かれた皆見先生のお顔は忘れることが出来ない。後に、泌尿器科に入院され私が主治医となったが「君はやっぱり泌尿器科医だな——」と呟かれたことがあった。最大、最高のほめ言葉を賜ったと、勝手に解釈させて頂いている。

さて、私が担当した皮膚科入院患者は計8人で、その内6人が乾癬であった。樋口謙太郎教授回診では「変わりありません。ゲッカーマン療法を行ってます」と、毎回同じ報告を申し上げると「そうか」と、既に次のベットに移られていた。テレビが普及され始めており、人気番組の「正義の味方・月光仮面」が医局でも話題になっていた。ある日、回診時に「ゲッコウカメン療法です」と声を小さくすると「そうか」で終わった。勿論、病棟医長からは厳しく叱責されたが、看護婦さんたちからは、一寸受けた様であった。

皮膚科と泌尿器科がしっかり分かれていたものは、夜の部に存在した。麻雀は皮膚科、酒は泌尿器科とお互いに認め合っていた。これは樋口教授、富川教授のリーダーシップによるものであった。サブリーダーも多々居られたことは、言うまでも無い。

以上、40数年前の皮膚・泌尿器科教室を個人的感慨で振り返り、それも断片的に記したに過ぎない事をお断りすると共にお許し頂きたいと思っている。

旭教授の下に開設され6代目の古江教授に受け継がれて、開講100年目を迎えられる九州大学皮膚科学教室が、今後更に発展、飛翔されんことを、昔の仲間の一人として、心より祈念していることを最後に明記しておきたい。

(九州大学名誉教授・泌尿器科)

ご 挨拶

玉 置 邦 彦

九州大学医学部皮膚科学教室が100周年を迎えられましたことを心からお慶び申し上げます。先程、古江教授からこの100年の九州大学医学部皮膚科学教室の歴史についてうかがいました。発足当時から現在まで、それぞれの教授の許で、皮膚科学会の指導的立場にあり、いろいろな面でリードされてきたことがよく分かりました。私も少し、日本皮膚科学会と九州大学皮膚科学教室について調べてみました。

初代の旭憲吉教授は皮膚科学会の発会式が、明治33年（1900年）12月15日に上野精養軒で行なわれていますが、その際、発起人を代表して主旨説明をされております。

そして、九州大学に移られてからは、明治40年（1907年）に福岡市で現在の日本皮膚科学会福岡地方会を発足させ、全国に地方会ができる先鞭をつけておられます。私個人にとって極めて印象的なのは、カネミ油症であります。その原因・特質が比較的早期に同定されたのは九州大学皮膚科学教室による皮膚症状をクロール瘰癧と診断したことによるとうかがったことでした。その後も、九州大学の歴代の教授が油症の研究班を指導し、更に古江教授は新しい治療の可能性を探ろうとされていることです。

このような姿勢があるが故に、最近のウクライナにおけるダイオキシン問題にも対応できたのだろうと推察致します。これに代表される業績を100年にわたって出してこられ、多くの大学教授や病院の部長を輩出し、日本の皮膚科診療に多大なる貢献をされた九州大学医学部皮膚科教室が今後も皮膚科学・皮膚科診療のリーダーとして更に発展されることをお願いしてお祝いの言葉に代えさせていただきます。

誠におめでとうございました。

（東京大学大学院医学系研究科・皮膚科学）